

## 杵築城（木付城）復元考

須賀金夫

(一)

杵築城復元の事業は、昭和四十四年早々から発足し、昭和四十五年九月完工、同年十月八日落成式に引つづき、三日間の記念行事が行なわれた。一部には相当な反対運動があり、またこれを危ぶむむきもあつたが、八坂市長老の一徹を以てその信念を枉げず、募金に企画に東奔西走、漸く目途がつくに及んで、市の事業に移して之を遂行し、遂に所期の目的を達したわけである。いまその趣意書を記して、立場を明かにしよう。

○杵築城（木付城・臥牛城・勝山城）復元趣意書

わがふるさと、杵築市の発祥をひもとくとき、格調高く、八坂・高山の清流に、いまもその面影を映す「城下町杵築」の息吹きは、木付氏四代頼直が、台山城を築いた応永元（一三五四）年にはじまります。

そして正保二（一六四五）年、松平氏初代英親が高田から転封されるにおよんで、町づくりは、ますますその形態をととのえ、領内の賢哲ここにつどい、伝統をつぎ創造を生み、まれに見る高邁な精袖風土と、豊かなる情緒をはぐくみ、燦然たる郷風を今日に伝えております。

ともあれ、世は都市化の波にゆらぎ、混沌をつづける今、合理の風潮冷やかに、わが先哲が樂きあげた、光輝ある文化の諸遺産を消し去ろうとし、心あるもののなげきをもたらししております。

さて、古くして、しかもよきものの泉脈をたずねつつ、新たななる展望のまなこを持つことは、文化継承としての、われわれ

の使命であり、また、明日を背負う、青少年に期待する心でもあります。

したがって、ここに、ふるさとの象徴「杵築城」の復元をはかるとともに、郷土博物館を併置して、滅失しつつある各種の貴重な遺産を保存したい念願、なお強いものがあります。

杵築城は、近く完工する「大分新空港」に走るバイパスを見おろす、ゆかりの城址にそびえ立ち、前にひろがる豊予の海ととりめぐるミカンの山野に、不滅の光彩をはなつことでありましょう。

とくに、由緒深い杵築城の復元は、六郷満山文化として知られる、仏教文化のふるさと「国東半島」のネットワークをおさえ、広域観光行政の立場からも、ことさら意義深く、かつ探訪にあたいするものと信じます。

郷土出身や市の内外を問わず、諸賢各位におかれましても、この復元計画に対して、溢れるような御賛同をいただき、この達成に全幅の御支援をいただけますよう、心からお願ひ申しあげます。

昭和四十四年 月

#### 杵築城復元期成同盟会建設委員

杵築市長 八坂善一郎ほか三十名の名前をつらね、左の工事概要を記載してある。

#### 杵築城復元工事概要

- 1 位置 城山公園東側
  - 2 構造 鉄筋コンクリート3階建
  - 3 内容
    - 1階 五六・九坪（郷土博物館）
    - 2階 三二・五坪（同）
    - 3階 二〇・七坪（天守展望台）
- 延 一一〇・一坪

4 高さ 二〇・六米（内石垣、約四米）

5 工事概算見積

|           |         |
|-----------|---------|
| 天守閣建築主体工程 | 三、三〇〇万円 |
| 鯨鉾製作取付工事  | 二〇〇万円   |
| 築地塀工事     | 二〇〇万円   |
| 石垣工事      | 二〇〇万円   |
| 合計        | 三、九〇〇万円 |

○ それに立面図 三百分ノ一を添え、表には復元予想図を色彩で描いてある。

○ また駅前・橋のたもとなど、目ぼしいところには標柱を立て「杵築城を復元しましょう」と呼びかけた。

これに対して、反対運動もまき起り、寄附お断りを戸口に貼り出した。反対の声の中には、今さら封建領主をかつぐこともあるまい。お金のむだ使いだ。いやあの城山に、お城の櫓があつたのかあやしい等々、いろいろな意見が流れていた。

筆者は、復元の是非について、今更論じようとは思わぬけれど、あの城山に、お城の櫓があつたのかどうかについては、一応研究する必要があると思うので、以下年代を追つて、考証してゆくことにする。

□

杵築城の草創は、木付親重の就封に始まる。三浦梅園が宝曆五（一七五五）年草了した「豊後跡考」によれば、木付榎非違使別当従五位下親重速見郡の武者所なり（大友 能直の孫（茂）親秀の六男なり……鴨川に住し木田村台山の城草創有……とあり。岡藩唐橋世済の遺稿「豊後国志」享和三（一八〇三）年編集によれば、杵築城は八坂郷にあり、地の旧名は木付……正徳二年八月、松平豊前守重休杵築の字に改作す、古城は木田村台山に在り、建長中大友支族木付肥前守親重築く所……とあり。

また「豊城世譜」に、木付頼直、竹ノ尾城の狹迫に依り、要害の地を撰み台山に城を築く、田原直貞繩張、この時鬼門降伏の

祈願足曳山両子寺大般若經転読、明徳四年癸酉正月十一日台山城経營、応永元年九月成就、同十一日竹ノ尾城より移徙す……とあり。

以上旧藩時代の著作を合わせると、台山城が二つあり、城の移転は台山―竹ノ尾―台山と三転である。これについての疑問や解釈は、いろいろと出されているが、決定版はない。

大正・昭和の郷土史「杵築史考」「杵築郷土史」は共に、木田村台山には触れず、竹の尾城から次の台山城へ移転のことも採っているが、それだけではなるまいとの説もある。

ここに私考を挿むとすれば、木田村の台山に今の若宮八幡の台地をあててみる。ここには現に木付初代親重の祠があり、当時はまだ八幡社は、八坂中村に鎮座中だったので、地勢の要害や広さ等から考へ、また交通の要衝をなしている点も併せて、最適の地であり、木付氏の城地設定にここを逸する筈はないと思われる。

木付親重の就封は建長二(一一五〇)年で、若宮八幡社の現地奉遷は、嘉暦元(一一三二)年だから、その間七十余年、二代能重を経て、三代貞重に及んでいる。若宮八幡奉遷が、単に靈夢に依つたのではなく、この木付氏の信仰によるものが大きい力であつたことを考えねばなるまい。木付貞重(三十三才)は、親重経營の台山城地に、若宮八幡社の奉遷を乞ひ、自らは竹の尾城経營に力を入れたものと、想定されぬこともない。然らば三転説は成立する。

次に二つの台山であるが、前の三転説が成り立てば、木田の台山は存在する。そして竹の尾城から三転した台山(現)は、初の台山の名の襲名ではあるまいか。地形から言へば島山であるし、本来の地名とは考へられない(現在は字城山である)。

(三)

木付城三転・二転の何れにしても、竹の尾城から現地城山に移つたことに異論はない。

その主は木付四代頼直、時は応永元(一三九四)年であり、世は後小松天皇で、南北両朝合一の直後、室町幕府閉幕の足利義満時代である。

頼直は、大炊六郎美濃守従五位下梅若丸、元応元（一二三九）年、貞重の六男として生れた。応安七（一二七四）年三月、菊池氏征討に足利将軍の義満が、九州下りをした時、先鋒として筑前高良山下に戦い功あり。また信仰にあつく、はやく喜山東照寺を建て、安住寺の銅鐘を文和二（一二五三）年、寄進し、迎接寺にも寺地を寄進し、またその娘のために竹の尾窟に宝樹碑を建つる外、特に若宮八幡社を氏神として仰ぎ、晩年に至つて、木付城（現）の築城を決行したのである。

木付城移築の理由は、いろいろ想察されるが、(1)竹の尾城の狭いこと、(2)海が浅くなつて戦略上不便となつたこと、(3)国東半島の交通の要衝が次第に東に下つたこと、などであろう。

(1)竹の尾城は山頂数反にすぎないが、木付城（現）は十数反、本丸・二の丸・空壕などをとるに十分である。(2)竹の尾城は鴨川の淵に臨み、海水は涯下につづく怪田の入江にみち、船をつなぐことが出来たが、海の隆起によつて、それが不可能になつてゆく。従つて、(3)国東方面への道も次第に東漸する。等を考えられるが、特に世情の推移（南北朝から室町期）は城砦の価値を高め、木付氏歴世の戦歴が、城の重要さを感じさせたものと思われる。

初代親重は、弘安四（一二八一）年元寇に大友軍として出陣、兄頼泰に代つて奮戦して、博多に功を立てた。この前後博多防壘構築、兵船作造（生桑寺裏文書参照）などにも当然奔走している。二代能重から三代貞重に及ぶ五十年間には、北条執権の衰亡、後醍醐天皇の建武中興、そして新田・足利・楠の活躍等、実に目まぐるしい風雲の中にまみれて、延元元（一二三六）年正月十四日京都東洞院鳥丸に於て、貞重が宗家大友貞載と共に、結城親光と血戦して倒るるまで、実に幾多の戦歴を重ね、頼直自らも高良山出陣その他、多くの実戦によつて得た経験は、将来への洞察を生み、所領安堵のためには、神仏への信仰と、固堅めの城砦構築を希つたのは、自然であらう。

ここに於て、木付築城の決意とその規模が想察される。今や城は往昔の城柵ではなく、また後世の修飾でもなく、実に固堅めの要点でなくてはならぬ。頼直齡すでに古稀を超ゆ、余命をこの築城にかけ、その豊富な知験を傾けて、この天与の島城を策定し、その上に堅固な城廓を構築したものとされる。

即ち八坂・高山二川に挟まるる突角に立ち、数十丈の断涯絶壁に海水四周する島城、然も広さに於て余裕あり、涯下に湧水あり、西方は南北両台地に通ずる道もあり、この西方台地の防禦線を確保して精戦に備え、海上交通によつて要地に迎ずる備えをもち、追手、搦手の城門を守れば、実に難攻不落の堅城といふべきである。

四

前項までの叙述によつて、この城山は当時として、最善の努力を傾けた堅城の構えをもつたものであることが想察される。即ち追手・搦手（南・北の城門）から上れば二の丸の広場でここに池あり、井戸あり、多くの備えをもつたであろう。本丸には城壁をめぐらし、空壕によつて三段を疊し、最高段の東突端には・高櫓のあつたことが想察される。

果せるかな、今度の城の基を掘穿中出土した瓦（巴）と石垣の築面は、築城当時の構えを物語つてくれた。石垣の築面はそのまま、ここに櫓のあつたことを示し、出土瓦の巴二面は、その土質・形式から推して六百年前のものと鑑定されたのである。（杵築城内保存）即ち五百七十七年前、この石垣の上に、この瓦を用ひた櫓のあつた事が立証されたのである。

なお、この櫓がいつ崩れたかなど、木付城その後の変遷について述べねばならぬが、ここには抜書を記すにとどめ、次回に譲ることとする。

○木付氏系譜

大友能直―親秀―

頼泰……

親重―能重―貞重―頼直―親直……

鎮直―統直―直清  
（四代目）  
 能直

木付親重の入部建長二（一二五〇）年から、十七代統直が文祿役の掃途門司入水（二五九三）滅亡まで、実に三百四十五年に及んでいる。

四代頼直の、木付城の樂城移転の応永（二三九四）年から、丁度二百年の在城で滅んだ。

○木付城が焼けたのが細川領時代

慶長十三（一六〇八）年四月より六月にわたり、松井康之（細川城代）木付に在りて思う。三斎及び忠利書を送りて病を問う。同年六月廿五日木付城雷火に罹りて焼く、幽斎及び忠利書を送りて状を問ひ、三斎は鉄砲弾薬を、忠利は秀忠より拝預の時服及び家具二十人前を贈れり、……（「松井家文書」による）